

三時の休憩時間の終わりが間もないことを告げる予鈴が鳴たが、長瀬由紀子はパイプ椅子の背もたれに手を掛け、背後の掲示板を見上げたままだった。いつのまにか、A3サイズのポスターが二枚並んで貼られていたのだ。共用のテーブルの上に飾ってある、百貨のコップに差した観葉植物のポストスライムの水を替えた後、そのことに気がついた。二枚のポスターは、どんな几帳面な人が貼ったのか、角と角とがびつたりつづいていて、掲示板の枠に対してはあくまで平行を保っている。さるNGOが主催する世界一周のクルージングと、軽うつ病患者の相互扶助を呼びかけるポスターだった。右のポスターには『世界を見よう、世界と話そう、語り合おう』とそれそれには『心の風邪に手をつなごう、みんなであつたさ』と向き合おうとそれそれには『心』の風邪に手をつなごう、みんなであつたさという数年が経っているのに、そういうものにお世話になつてゐる場合ではないのだ。であるからして、ナガセが見上げているのは、主にクルージングのポスターの方で、ひととおりの内容を読み、写真を、特にカヌーに乗った現地の少年の写真を眺めたあとは、でかかど書かれたその代金に視線を固定していた。

一六三万円。

「どないしたん、予鈴鳴つたで、行かん」と

肉厚な手に後ろから肩を叩かれる。さつきまで携帯電話で小四の次男に炊飯器のセットの指示を出していた、ラインリーダーの岡田さんだった。

部屋の四方からこうこうと吹き付けてくる風の中で、ゆるゆると回って埃を落としたのち、岡田さんについてクリンルームから出る。習い性で、無意識のうちに腕まくりをしながら洗い場に並ぶ。生白い左腕の内側を眺めながら、ナガセは先週自分に必要だと思えてならなかった、その腕に刺青を入れることについて考える。どうしてあんなに刺青を入れなかったのだろうと。

手を洗う番はすぐに回ってくる。洗剤で腕を擦りながら、だんだんそこに自分が入れようとした文字が見えてくるような気がしてくる。『今がしばらくの働き盛り』とよく考えてきたら、文面の今は二十九歳になつたばかりの今であるのに対して、刺青はずっとあるものだから、どうしたって矛盾しているのだが、先週はとにかく、いつても自分自身に見えるところにそう彫らなければ、とずっと考えていた。一文字いくらなのだろう。いちばんは、一番、にしたほうが安くあがるだろうか。でも自分としてはひらがなのほうがしっくりくるのだが。字体はゴシックがいい。月曜日には思い付いて、ラインについている時間中はおもろん、工場が終わってから友人のヨシカが経営しているカフェで給仕のパートをしている時も、そこから自転車帰っている時も、家でデータ入力の内職をしている時も、ずっとそのことを考えていた。いやでもさすがにそれは無駄な出費なんじゃないか、と金曜の午前のラインで考え直したが、昼休みに在庫チェックの用事でパソコンをさわった時に、マンチエスター・ユナイテッドのウエブページがステレオフォニックスのアルバムの名前を腕に彫つていくと知って、やはり自分もやるべきだと思いつつ、どうしてデータ入力の仕事をやめた後、やばいと思つた後、一文字いくら調べておたが、眠ってしまった。起き抜けにすぐ、土曜のパソコン教室に出かけて、お年寄り達にメールのBCCのやり方について教えている時に、やはりこれから季節、工場での仕事はいいとしても、このパソコン講師の仕事に刺青は不利なのではないか、とふと思ひ直した。

シャツを七分袖から五分袖に衣替えしたばかりだった。

たぶん自分は先週、こみ上げるように働きたなくなつたのだから、他人事のようにおもう。工場の給料日があつた。弁当を食べながら、いつも通りの薄給の明細を見て、おかしくなつてしまつたようだ。『時間を(A)で売っているような気がする』というワレズを思いついたが最後、体が動かなくなつた。働く自分自身にはなく、自分を契約社員として雇っている会社にもなく、生きていくと自分で吐き気がしてくる。時間を売って得た(A)で、食へ物や電気やガスなどの(B)を細々と買い、なんとか生き長らえているという自分の(C)の頼りなきに、それを続けなければいけないということに。

薄給とはいへ、こは人間関係が悪くない。特にラインリーダーの岡田さんはいへ、工場での初日にガタガタ震えながらラインにやつてきたナガセを心配して、何くれとなく面倒を見てくれる。おかげでナガセは、時給八〇〇円のパートから、月給手取り十三万八千円の契約社員に昇級したこれまでの四年間を、なんとか持ちこたえることができた。先月には、ラインの副リーダーに昇格した。他の人も皆そこそこいい人

新卒で入った会社を、上司からの凄まじいモラルハラスメントが原因で退社し、その後の一年間を働くことに対する恐怖で棒に振つた経験からすると、職場の空気が悪くないということは得がたい美点なのだとはい切らざるをえない。

ナガセは頭を振つて、次々と浮かんでくは消える思考を振り払おうとする。自分には集中力があり、単調なことを飽きずにこなせる。この仕事には向いている。雑念に苛まれていない限りは。

自分が人ではなく、ラインだったらよかつたのに、と思う。ほとんど青味がかった見えざる蛍光灯の光が、コンベアを冷たく照らしている。ナガセは、膝の上で手を閉じたり開いたりしながら目を閉じ、深く呼吸する。

休憩終了のベルが鳴り、ラインが動き始める。休憩前よりは軽く感じる手を上げて、流れてきた一本目の乳液のキャップを固く閉めて、表裏上下とひっくり返して確かめ、再びコンベアに戻す。これから約二時間、ナガセはそれだけをする人間になる。

一六三万円は、この工場での年間の手取りとほぼ同額なのだ、と唐突に気が付いた。ポトルにスレのあるものを三個、キャップに小さなカケがあるものを一個、手元のラックの中にはねた直後のことだった。ナガセは一瞬だけ息を飲んだが、手は止まらなかつた。腕に字を彫ることについては、その日それからラインに着いている間は一度も考えなかつた。

\*「長瀬由紀子」が「ナガセ」と書かれることで、どんな印象の変化があるか、考えてみなさい。

\*女性であることや、登場人物の個性が際だつて物語が展開するというより、おかれた状況によつて誰でもがそうなりうる、そう考えうるという意味で、人格性が薄まる印象を与える。

\*登場人物から情緒性が失われ、読者には感情移入しにくく、突き放した描写で、物語の展開を客観的に見届けるという読み方になる。

\*「ナガセ」はどのように生活しているか、具体的に書き出しなさい。

平日は契約社員として、工場のラインで働き、その後は友人のカフェでパートをし、自宅に帰ってから、データ入力の内職をし、土曜日はパソコン教室の講師をしている。

\*本文空欄(A)(B)(C)に適切な語を入れなさい。Aは漢字一文字、Bは外来語である。

A 川金 B エネルギー C 生

\*刺青に異様に執着したり、世界一周のクルージングポスターをじっと見たりする「ナガセ」の心情を本文を踏まえて、考えてみなさい。

正社員として働いていたナガセは、凄まじいモラルハラスメントのために精神的にうちひしがれ、働くこともできない一年を過ごさざるを得なかつた。現在は、契約社員だが、人間関係のよい工場に働くことができるようになった。だが、仕事そのものにはやり甲斐を感じられず、また、掛け持ち仕事をしなければ、生活ができないことから、自分の意識を何かに執着させて、生きることに、働くことになんとか意欲を持たせようとしている心情。

\*ナガセには、自分の生きる価値、アイデンティティが持てない状態であることも、だから、**遠く二無二働いている。身体を動かすという**ことで、生きていても良い、という感覚を保っている。(「まだまだ」に つながる)

寺社町の火曜の夜のカフェは暇で、ヨシカは明日の早朝に出す分のスコーンを成形して、冷蔵庫にしまった後は、ずっとパソコンに向かつて顧客向けのメールマガジンの草稿を書いていた。ナガセも、入口にやつてきた客からは見えないソファに座って、ポップアップ絵本の作り方についての英語の本を眺めていた。暇になつてきてから、すべてのテーブルに置いてある小瓶に差したポストスライムの水を替え、何をしたらいいかとヨシカに訊くと、何もしくなくともいい、とまず言われた。何もしないのを苦痛だと、反駁すると、ヨシカは絵本を寄越してきて、こういうものをだろと眺めることもあなたには必要なのではないか、と提案されたので、わからないうちに、理解しようともせず、ただ眺めていた。ヨシカはいいかげんポストスに飽きていないだろうかと思う。前に大阪で行つたカフェのテーブルの上には、シュガーバインを水に差したグラスが置かれていて、とてもかわいかつた。シュガーバインなら自室に、ハイドロカルチャーの株があるが、枝を切つてよそに持ち出すとなると、どうしても簡単なポストスになつてしまふ。

\*生徒には、神内の解答までを要求しますが、授業では、彼女のアイデンティティが壊れていて(壊されている)、未だ修復できていないことを確認したい。もちろん、工場での人間関係によつて、同僚や上司から認められることで、回復しつつあるが、仕事そのものに生き甲斐を感じているか、といえは、そうではないことを押さえます。

\*「ナガセはヨシカの店からの帰りに、車に乗りかえそうになったことがきつくて、工場の給料全額を一年間預金し、一六三万円貯めようと決心するそんな矢先、大学時代の友人「りつ子」が、幼稚園児の娘「恵奈」を連れて身勝手な夫の元を出て、「ナガセ」を頼ってきて、一緒に暮らすことになる

十月の連休の最終日には、あいにく雨が降った。東大寺方面に行くために、わざわざヨシカの店の休みをとったのだが、家にいることになってしまった。りつ子も母親も不在で、家にはナガセと恵奈がいた。

どこかで雷が落ちる音がして、部屋の電気が消えた。

恵奈は、息をひそめてじっとしている。仕方がないので、ナガセは恵奈を伴って廊下に出ることにする。縁側は、雨に晒された庭に面している。庭いじりは母親の領分だが、むら気なところがあるので、今年は全体的に売っている。体育座りをしてる恵奈が、廊下の奥に目を凝らしている。何？とたずねると、あれなに？と壁際に置いたポトスライムを指差した。あれは、ポトス、と答えると、こち持つてきてもらっていい？と頼まれる。ナガセは、ほな持つてくるわ、と承諾して、高さ三十センチほどのポトスの鉢植えを持つてくる。

洗面所の近くに置いてあるので、水だけはしっかりやっていたが、基本的にはほったらかしていたら、好き放題に伸びてずいぶん不格好な形になってた。切った若い茎を水に差したものをヨシカの店に置いているのだから、それらもまだ枯れずに成長しているの、また刈り込む必要がない。玄關にも、ナガセの部屋にも、そして工場のロカールームにもポトスは置いてある。どれもこれも、安いコップに差して水を替えているだけだが、まったく萎れる様子がない。改めて、ポトスはすごい、と思う。好きではないが、すごい、と。

「ただのはばやん」

「葉を見る植物やねんて。でもまあ、見飽きたかなあ……」

そう遠くない空で稲妻が閃き、また雷が落ちる音がする。停電はしばらく復旧しそうにない。ナガセは、鉢と使っていないコップや空き瓶をいくつか持つてきて、ポトスの水差しを始めた。恵奈には、自分がやっていることについての説明はしなかったが、恵奈はおとなしくナガセの手元やポトスを見ていた。

恵奈にポトスを差したコップを渡し、これに水を入れてきて、と言いかけて、目の前で雨が降っていることに気付く。これに雨を入れて、と言いか直す。恵奈は黙って、コップを縁側の外側に差し出し、雨水を溜める。

「もしこの家を出て行く日が来たら」あくろをかいたナガセは、若い葉と茎を無造作に切り取りながら言った。「わたしもおかちもお金ないから何も持たせられへんけど、それを銭別として持つて行き」

せんべつ、などという言葉を理解できたのかでできていないのか、恵奈は神妙な顔をしてうなずいた。

母親が帰ってくるまで、二人はポトスの水差しをして過ごした。家じゅうの余ったコップにポトスを一葉ずつ差し、廊下にずらりと並べた様子は、それなりに壮観だった。

その夜も雨は降り続いていて、ナガセは雨粒が窓を叩く音を聞きながら、夢をみた。ポトスを食べている夢だった。葉っぱを縦に細く切つてドレッシングであたり、さっと煮ておひたしにしたり、根をすりつぶして薬味にしたり、茎を味噌汁にいれたりしていた。味は、ネギほどの刺激はなく、ほうれん草よりまろやかで、キャベツよりは苦みがあり、レタスには及ばないが水気があった。

ポトスを食べたナガセは満足して、にやにやしながら手帳に書きつけていた。

10「ナガセは一六三万円貯めると決めてから、手帳に経費を付けていた。これはけっこういけるのではないかと。本当にお金がなくなってしまうたら、ポトスを食べればいい。栄養価はどんな感じなんだろう？」

夢の中のナガセは、押入から昔のものが入っている段ボール箱を出してきて、中学の時に家庭科の授業で使った「カラグラフィ食品成分表」を開き、ポトスについて調べ始めた。目次に「ポトス」という言葉を発見したところで、ナガセは目を覚ました。

工場でも、ナガセはポトスのことばかり考えていた。口の中に味が残っているような気がして、夢というの本当に不思議だとあらためて感じ入った。乳液の瓶のふたの閉まり具合を確かめながら、実際に自分はポトスを食すべきなのではないかと思ひ詰めた。何にしよう。夢の中で食べていたやり方は、すべて、初めて食べるには思い切っているような気がしたので、ナガセはラインに着いている間じゅう、ポトスを口にする方法について考えていた。

アジサイの葉っぱには毒があるんやとて、と母親が言い出したのは、ヨシカの店から帰って、寝転んでテレビを見ながらぼろぼろと泣いている時のことだった。母親は、ナガセが恵奈から借りたままになっていた図鑑を読んでいた。

アジサイの葉の毒素は、胃の中の消化酵素と反応して、シアンを生成します。

母の読み上げに対して、ナガセは、そうか、と生返事をしたものの、しばらくして、はっと起き上がった。ポトスは大丈夫か？と思ったのだった。

「おかん、ポトスはある？ポトスは？」

「ポトス？ええと、ポトス、ポトス……」

母親は索引を引くが、ないわ、と言った。

「観葉植物は載っていないみたいやな。子供の図鑑やから」

「そうか……」

ナガセはまた横になろうとしたが、猛烈な眠気を感じて、歯を磨きに立ち上がった。なんでポトスのこと知りたかんと、まさか食べよとか考えてんちゃうやろうな？という母親の声が追ってきたが、(A)を指されたことが恥ずかしくなり、無視した。

自室に戻り、インターネットで調べると、ポトスにも毒があるようだということがわかった。なんだったんだらう、この二日間は、どうなだれ、早々と布団に入り、まるで失恋した相手にそうするように、ポトスを食べようとしていたのを忘れることにした。

食べられないことにすねてしまい、ナガセは恵奈にしばらくの間ポトスの面倒を見てもらうことにした。なんでおせわやめんの？と訊かれる、落ち込んでるから、と答え、なんでおちこんでんの？と更に質問されると、食べられへんもん、それ、と正直に答えた。恵奈は、ふんんと首を傾げながらも、ナガセのポトスへの思い入れが低下した数週間の間、だ、ほぼ毎日、何個もあるポトスの水差しの水を替えてくれることになった。おかげで妙に色艶が良くなったポトスは、さらにわざわざ増殖していった。

正社員になり、目的を持って家を探し始めたりつ子の決断は早く、三月上旬には引越しの準備を終えていた。離婚についての話し合いはまだ少し続きそうだという。お金返ってきそう？と訊くと、そこを争ってんの、とりつ子は眉をひそめながら笑った。

引越しの日は、ナガセもパソコン教室の仕事が終わってからすぐに、りつ子の新しい家に行つて手伝った。いったん家に戻って、ポトスの水差しを持つていった。秋から差して手伝ったそれは、それなりに増殖して、根っこもジャムの空き瓶の底を三周するほどには成長していた。ビニール袋に入れてぶら下げるのも不安だったので、ナガセは自宅から駅まで、ポトスの水差しを片手に持つて歩いていった。

また来るよ、と改札口で手を振りながら、ナガセはここに来るまでの電車賃について考えていた。けちくさいようだが、二週に一度ぐらいは来たいとなると、けっこう大きな額になるので、自転車由来のような、来れるかな、などと切符を見ながら首を傾げ、そもそも自分にはそんな時間さえ取れないかもしれないということに気付く。少し愕然とした。お金のために、お金を使わないうために、無駄な時間を作らないために働いているからなのだが、そのことが理由で自分は、少し離れた友達の家に行く余裕すら持てない。世界一周の費用は順調に貯まっていたが、ナガセにはなんだか、そのことが微かに空しく思えた。

\*本文中の空欄(A)に適切な熟語を入れなさい。

図星 図星を指すり推測して大事な点をすばりとうく

\*「ナガセ」が、ポトスライムを育てている理由は何か、どう思っているかも含めて答えなさい。

好きではないが、お金が掛からず、水さえあれば、栽培でき、増やすこともよそに持ち出すことも簡単な、たくましい植物だから。

\*たくましさは格別の意味を込めるつもりはありません。後にも出てくるように最低限の栄養だという点を押さえれば良いと思います。

\*「ナガセ」がポトスを食べることに執着し、食べられないと分かると異常に落ち込む心情について、説明してみなさい。

ポトスが、水で増殖するというだけの、つまらない植物から、食べられるという価値を持つものになれば、経済的に有効であるだけでなく、自分が育てていることに格別の意味が生まれてくるから、それにこだわったのだが、結局毒があることまで分かって、ポトスに期待した分落胆が大きく、まるでポトスから裏切られたような気持ちになった。

\*ポトスが無意識のうちに、自分とオーバーラップしていることは次の夢で、「捨てられない」に関係してくると思いますが、簡単に「こゝで、書いてしまふと、生徒は分かったような気になってしまふのでは」と思っています。

五月の半ばぐらいからナガセは咳込むようになり、七月、高熱を発して工場や倒れ、数日間の自宅療養を余儀なくされる。少し回復したので医者に行くこと、過労で風邪が治りにくくなっているようですね、と言われた。ナガセの説明をたまたま、換えただけの若い女の医者は、パソコンのモニターに体を向けたまま、ナガセの方は見ずに診断した。口を開けさせて喉を点検することさえしなかった。点滴を受けたんですけど、と言うと、じゃあもうしてください、と、やはりナガセの方は見ずに言った。

診療室のドアを開けながら、わたしはあの人の気に入らないことを何か言っただろうかと考えた。ナガセより何歳か年下の、かわいらしい女の医者だった。若くてかわいくて女で医者だなんて、もう人生八割がた勝ったも同然なんだから、せめて視線ぐらいくれたっていいだろう、と点滴がもどかしく管の中を伝っていく様を凝視しながら思った。大きな咳をすると、針が腕に食い込むような気がしたので、小刻みに咳を吐き出すようにして、無駄なストレスをためた。

若い女の医者の無関心と、母親やヨシカの心配の温度差がすごかった。車を出して総合病院まで連れて行ってくれたのはヨシカだった。母親は仕事場から、三時間ごとにメールを送ってきていた。女の医者がこちを見なかった話をする、ヨシカははげと笑って、けちくさい女、と吐き捨てた。ナガセは、診断書目当てでやったからええねん、と強がりを見た。

ナガセは、肩越しに縁側のガラス戸の向こうで降りしきる雨を眺める。まだ相当降るとテレビでは言っていた。

雨のある国に住んでるだけでも幸せなかもしれない、と思いがながら、ナガセは眠りに落ちていった。あの若い女医にその話をしたいと思っただ。彼女はなんと言うだろうか。何も言わず、やはりこちらに背中を向けたまま、というのが正解だろうか。そんなふうには考えたのを最後に、ナガセは意識を失った。

夢の中でナガセは、シングルアウトリガーカヌー(世界一周のクルージングのボスターに描かれていたもの)に乗って、あちこちの島に寄っては、そこにいる人たちにポトスライムの水差しを配っていた。たいていは、大して喜ばれはしなかったが、水だけでどんどん増えるってすこくないですか、とナガセは根気よく控えめに勧めた。

ある島では、でも水がないから、とすげなく受け取りを断られた。この一年間で、ポトスを育ててその島を後にした。

瓶を一手に取り、陽に透かして後。太いたくましい根から、細い根毛が伸びて、うねうねと瓶の底を三周している。食べられへんのよなあ、と思う。にわかには信じられない、積んでいるポトスをすべて海に捨てよう、と、やみくもにカヌーをぐらぐら揺らしてみることが、ポトスの瓶には落ちず、ナガセが疲れてしまっただけだった。そもそも本気ではなかったのかも知れない。

わたしはまだまだだ、とナガセはポトスの瓶で溢れかえったカヌーを漕ぐのをやめてうつぶむ。そのうちに、青い海の上でカヌーはどんどん流されていく。流されて、流されて、気がついたら、ナガセは自宅の庭に流れ着いていた。家の裏庭には塀がなく、海岸が広がっていたのだ。

ナガセはカヌーから降り、当たり前のように自宅の縁側に上がった。その日は仕事があった。うつぶいまま、それでも仕事には行くつもりだった。

ひさしぶりにインターネットにつないだ後、雨水タンクを買ってしまっただ。どうせ世界一周の資金が貯められなかったのなら、何か欲しいものを買おうと思いついたのだ。それで雨水タンクを買った。

その夜は、凄まじい雨が降った。夜中に起き出して、自室の雨漏りの下に洗面器を置くために下に降り、雨戸を少しだけ開けて雨水タンクの様子を見た。雨に打たれながら、微かに身震いしているような灰緑色のタンクを眺めつつ、ナガセは、立て続けに三回大きなしゃみをした。

部屋に戻り、枕元の電気スタンドをつけて、しばらく手にとっていないかけた手帳を開いた。

18980

その下に何か書くことを探したが、見つからなかった。もういい、と書きかけたが、やはりそれはやめておいて、ナガセはスタンドを消した。

明日の教室には行くことにします、お騒がせをしました、すみませんでした、と頭を下げながら電話をかける、二日休んだぐらいでそんなに謝ることないですよ、と会館の習い事の管理担当者であるおねえさんは言った。そうか、まだパソコンの方は一週しか休んでないんや、とカレンダーを見ながらナガセは不思議な気持ちでいた。

工場の方はすでに九営業日休んだ。岡田さん以外のラインの人からも、ほんとに大丈夫？だとか、こっちは心配しないでください、というメールがやってきて、ナガセは恥ずかしいような、ありがたいような思いで、だいぶよくなりました、とそれらに返信していた。

風呂に入り、休んでいる間に散らかした自室の片づけをしてしまおうと、ますますやるのがなくなってきた。十二時半を差す目覚まし時計を睨みながら、ヨシカの店にも行くのかと考え、そういや雨水タンクはどうなったのだろうと思いつき、庭に出た。

雨水タンクを開けると、底から五分の一ほどまで水が溜まっていた。思ったほどではないなと少し落胆しつつも、タンクの経費は掛かったものの、たいてい水を手に入れたことを喜び、しばらく替えていなかったポトスの水差しの水を替えた。廊下に十数個、ずらりと並んだポトスライムは、三枚から五枚ほどの大きな葉をつけ、無闇に色よく育っていた。元気がよさな茎から分岐した若いポトスの茎が、葉の先の方だけをまた親の茎にくっつけて「く」の字に折れ曲がっている様は、蝶の蛹に似ていた。ビニールを固めたような均一な色合いによつてどう見ても作り物のように見えるポトスが、やはり生き物なのだと感じるのはそういう姿を見た瞬間だった。

ポトスをまた廊下に並べなおしている間に、郵便受けに重いものが落ちる音がきこえたので、玄関に出て行くと、りつ子からA4サイズの封書が届いていた。中には、りつ子からの短い手紙と、恵奈が作ったと思しき、クレヨンで手描きされた絵付きのカタログのカラコビーが入っていた。「恵奈が、夏休みの自由研究をもう完成させました。ナガセに送れと言うので送ります。研究のタイトルは「食べられる(A)」です。……」

ナガセは、りつ子からの手紙をちやぶちやぶの上に置き、恵奈の自由研究のカラコビーを少しだけ眺めた。イチゴにはよほど思い入れがあるのか、種の一つ一つまで丹念に描いていて、逆にまずそうにしていた。あさつきの絵は、緑のクレヨンで線を引いただけで、まるでやる気がなかった。特徴が捕らえ辛いらしく、描きにくそうにしている。バミントの説明のところには、おかあさんが、これを、すきです、というキャプションがついていた。ローリエの欄には、おかあさんが、これはシチューにはマストやで、と書いていました、と書き加えられてあった。

りつ子や恵奈への返事を書こうと、固定電話の横に置いてあるメモ帳とボールペンを手にとったが、その時間はもう少し先にとっておこうと元の位置に戻した。今ぐらいだろうそんな時間が取れるのは、とナガセの冷静な部分論そうとしたが、なんとなく、すぐに返事を書いてしまおうのはもったいないような気がしたのだ。

ひさしぶりに、部屋着でない服に着替えて、自転車が出かけた。次の日からまた、工場より比較的負荷が軽いとはいえ仕事に出るのが妙な感じがした。休んでいることが体が馴染んでいて、これから大丈夫なのだろうかと不安だったが、辛いと感じればうまく手を抜けばいいと気軽に思った。今までそんなふうには考えたことは一度もなかった。

\*これまでのプリントを参考に、空欄Aに適切な熟語を入れなさい。

観葉植物

\*夢でポトスライムを配っている時の「ナガセ」の心情を考えてみなさい。

自分が病気になるって、仕事を休んでしまい、それが原因で、世界一周の資金が貯められなくなったことで、自分のふがいなさを痛感すると同時に、何かというお金がどれぐらいいかかるとか、その資金すら手にできなくなることが、一層の落胆を生んでいる心情。

\*元気がよく育ったポトスは「ナガセ」にどのように受け取られたか、考えてみなさい。

あまり世話をされなくても、生物として、自分でしっかりと成長しようとする、若々しい生命力を見せるもの (覚え書きの解答でも)

\*恵奈が自由研究を送ってくれたことを「ナガセ」はどう感じたか、考えてみなさい。

ポトスが食べられないと知って、世話する気もなくすほど落ち込んでいた時は、さほど気にしている様子もなかったのに、そのことを忘れず、小さいながらもなんとかナガセを慰め、励まそうとしてくれる恵奈の気持ちがいけず嬉しく、じつと嬉しさを味わっていたと思っただ。

\*覚え書きに書きましたが、ナガセはポトスは捨てられないと思います。ポトスを捨てることは、価値のない、ただ生きているだけの存在の自分を捨てることになってしまうからです。それでも、なんとか生きていこう(仕事には行こう)とする悲愴さと対照的なポトスを押さえたんです。